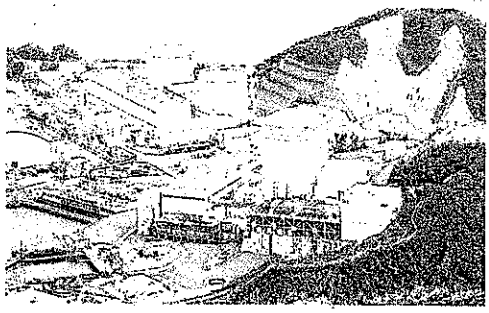
7/28 朝日

老朽原発「関電は情報公開を」

美浜3号機営業運転

6月に再稼働した、運転開始から40年を超える老朽原発の関西電力美浜3号機（福井県美浜町）が27日に営業運転に入った。杉本達治県知事が再稼働に同意する上で重視した判断材料のひとつが、安全対策などを点検した県原子力安全専門委員会＝写＝の評価だった。委員長の鞍谷文保・福井大教授（振動工学）に今後の課題などを聞いた。



40年超運転を実施した3号機（手前）＝6月20日、福井県美浜町、朝日放送テレビヘリから

――美浜3号機の安全対策の確認にあたり、どの部分に注目されましたか。

「原発事故が起きたときには何よりも原子炉を冷やさなければならない。最も重要なのは電源確保と冷却機能の二つで、これが何重にも守られているかという点を重視した。電源で言えば、外部電源や非常用ディーゼル、電源車など、多様な設備があることを確認した」

「設備以上に重要なのが人だ。委員会で事故訓練を視察した限りでは、所長をトップとする指揮命令系統がかなり細部まで組織化され、炉心溶融など最悪のケースを想定した対応を行っていた」

「今後はこうした訓練の頻度が重要だ。訓練を重ねて隙を洗い出せば、想定されるトラブルの範囲も広まるだろう」

――原発は運転開始から44年になりますが、経年劣化の懸念はありませんか。

「原子炉内に入れているサンプルを取り出して検証した結果、60年運転しても問題ないという説明を関西電力から受けた。ただ、委員会としては『継続的な改善』を関西電力に強く求めている。国内外の他の発電所で起きたトラブルの知見を得て、プラントに対策を施すということだ。世界にある440基の原発のうち2割は40年を超えており、参考になる先行事例がたくさんある。日本は地震が多いが、原発の耐震設計の根幹となる基準地震動の考え方も最新の知見を積極的に取り入れてほしい」

――美浜3号機は10年以上停止していましたが、その影響はありませんか。

「個々の機器についてはメンテナンスが施されてきた。再稼働後、補助給水ポンプの上流にあるフィルターに鉄酸化物が詰まる不具合があったが、工程に大きな影響はなかった。停止中も動かす訓練をしていた成果だろう」

――今後、関電や国に求めることはありますか。

「安全性を高めるには事業者が主体的に改善を続ける姿勢が欠かせない。立場の上下の関係なく、改善すべき点を主張できる社内の風通しの良さが求められる。原子力規制庁も、全国の原発で集めた様々なデータを電力会社と共有できるような仕組みを作るべきではないか」

「情報の透明性も高めていくべきだ。原発では基準地震動の設定がしばしば問題になる。九州電力は地震が起きた後に原発構内の揺れを調査して公表している。関電は具体的なデータをあまり公開しようとしてこなかったが、こうした情報は原発の安全性を判断する上で重要な材料だ。積極的に公開した方がよい」

（聞き手・加茂謙吾）

安全対策評価の専門家に聞く

鞍谷文保・福井大学教授

くらたに・ふみやす　1957年生まれ。兵庫県立工業技術センター勤務や和歌山大教授などを経て、2008年から現職。

福井県原子力安全専門委員会

国内最多の15基（廃炉作業中も含む）の原発が立地する福井県内の原発の安全性を評価する組織で、工学や物理学の専門家らで構成する。運転開始から40年を超える関電の美浜原発3号機と高浜原発1、2号機（同県高浜町）については2016年から委員会を14回開き、安全対策の有効性や課題を議論。現地調査なども行った上で、4月に「必要な安全対策が講じられている」とする報告書を杉本達治知事に提出した。